称益政

こゝろねは花まても行木末かな

権大僧都心敬

さけはまて杉のしらねの山の木

入道親王尊道

卯花のけふ見る山や有明の月

後小松院御製

しられけり月はいつまて有明の雪

前中納言雅康

うつりゆく月はしもえぬ秋の暮

藤原長清

卯花とみしを雪の下葉かな

常光院権大僧都堯恵始年

涼しさの名残は見ゆる道の辺

従一位安子

まよふ世と思ひしつきの人もなし

春は猶花に見る月の河ると

源政元

いつくへか雁のきこゆる山の端と

都への秋ならむ中に

権大僧都心敬

一声に人はねぬ山のゆふべかな

権大納言実隆

まとかしらやく都人

御製

きほはまた麓はかりのゆふくれに

入道前右大臣

雲かゝる山の木末やはるかなると

源尚純

晴る月しはしさえ雲にかくれ

ちかきと　源時助

くもるしのむらはやかけやるもよ

五月雨の御題にて發句よ

宗碩法師

しほれぬのやなきの一もと

法眼専順

月をしかつてや[illegible]

天のくもり御晴[illegible]

山かけ[illegible]百韻[illegible]

發句よ　[illegible]右大臣

さて人の[illegible]山[illegible]

五月雨と

左衛門督康[illegible]

五月雨ハ[illegible]

三代集の作者と[illegible]

御[illegible]百韻の發句

御製

さくらの雲[illegible]

夏のはしめ三首よ

右大臣　実久

まち花は散りなんつかわれし

内裏にて和漢をもて夏の納よ

権大納言宗房

五月まつ花のかをりなをこそさくらにも

前右大臣　実

夏草は雪さしけりしめ末葉かれ

従一位為子

下水にこほれぬ池はさゝなみもすゝし

智蘊法師

小松ゆふ山のふもとのいさゝ川すゝしき

小野綾にとまりて　内裏千句

句のはしめの中に

前右大臣

柳はとくめともそらくく文居られし

大染金剛院殿会にて家居左大臣殿

百韻のはしめ哥御よ

清眼言順

よそもしくら月はいつとの中にてもかえ

納涼をはなれて

玄清法師

まとゐしてさむれは清水かけし

宗祇法師

うすくもにえてすむ月の上弓かな

宗祇法師

秋とりて袖のなみたやむさすらん

法橋兼載

さすらへもよしとし山木風ならむ

多々良政弘朝臣

うすやまきりまよりする秋の声

新撰菟玖波集巻第二十

発句下

秋のはしめをよめる句の中に

前摂政太政大臣

風ならく露とく秋のはきかな

源政長朝臣

行むつき秋とゆくらぬ一葉かれ

法印行助

露みしらるる風のさき一葉かな

前関白

ちりもまださ秋のせをまつ柳かれ

今一木の葉かなしからしまふりけり

くもの林はにゝまくりも道こゝろへ

宗砌法師

鹿をとつさ風とはつかりも荻

七夕まれに逢ふよ

太政大臣

天河わたるをいとゝのこの木の秋

宗伊法師

名月やふしみの里にきさの秋

権大僧都心敬

いのりこやちとせよりわかめの長

閏七月盡日よ

宗祇法師

此夜ふかやまる二たかたの星

秋まへ発句の中よ

法眼専順

ゆくくの之月をゆかしのみ

隆招法師

日晩るに又のよをすみあまる山の礼

法橋兼載

錦よし玉やうつしけ萩の露

慈照院准三宮太政大臣

秋の花は萩をこゝろにあはれさる

文明十三年八月十五日此所迄

奥書よ

御判

林さへ花の花にやすらひかゝらしぬ
草花の発句とて
入道前右大臣
花ちらきはゝ久しく露の下葉かれ
源尚純
風まちて露に行きし萩の花
智蘊法師
若もみし小草も花の姿かな
能阿法師
河せの吹よりうつる花もあれ
宗砌法師
春の木も袖より枝も見えな

またわたしうつしろ色こそ深く
染もまさりし
宗伊法師
きのふきくまれはかくいふ林の風
秋の発句とての中に
源政長朝臣
露のよいかきりはしのか秋しらす
宗長法師
吹くる風や百草の萩すゝき
権大僧都心敬
柳かりかりの月さしあへぬ
入道前右大臣

鷹まちて松に雲ゐのへつれし

肖柏法師

一とせにすしやかゝらく名に月

前大納言雅親

月ハてらすゆふへのへるか

権大僧都紹政

見わたく月ハまさ向くゆふかれし

後成恩寺入道前関白

霧ふかき月まちのゝりの夕かな

文明三年八月十五日常徳院殿御

のちの今宵 慈照院入道前太政大臣

すゞしくの月ハ人つ白雲もなし

御法にかへりしはやく八月十五夜まさ道寺

後花園院御製

月人の名のたかさの殿にるゝ十五夜

御製

月の名もしるく秋もなし

太政大臣

月こよひのまことのみるゝ人らか

いまたみる 前中納言定家卿

雨ふるまゝにかへる

宗祇法師

めぐりしもかはらぬ秋の月

十五夜の発句よ

法眼専順

月見しせるのみかは秋の空

宗砌法師

名やかはりこしくもりなきよ

多々良政弘朝臣

月は秋あはれなるしいの一夜かな

法橋兼載

雲まよふ月しかく有見る

宗祇法師

四方よりも心やる月を秋の花

しる見人をもとよ

中空の月にてきさの山かれ

此発句は九歳よりけるかはく

よみけるとかや

あかつきの月のあかりさしと遠けるの

修理大夫政弘

月ふらし月にわかれて都のかれし

あらしふくいさきて風まよふ

白川の関越えて

秋風のあつし花の都出し

秋もまた発句し

能阿法師

一葉ふく秋はせしものきなり

宗祇法師
梢の染はつゝむも秋の木末かれ
法眼寿順
庵よくし水や草隠く岩の間
智蘊法師
うつろふて草まくらの風寒ふ
よしさ人しらしと
菊しけき霜へゆりの野わかれ
九月十日百韻の巻頭に
御製
わかのこゝろきくいこゝてふのつゆかふ
なる十三夜水

庵のさ石とめつら月の二夜かれ
とに岩のとゝめもしかは月のかけ
後小松院御製
文明六年九月廿日書月次に
和漢連句に
前関白
山かけし庵しけりもあきの風
秋のめのるも
三条親王
秋の色とふかにかゝし山かかふ
御製
梅やうれ一葉ぬ 池のおもにかもれち

夕されはむしのねよはき白木末かな
なをしねとわくれさともあきの下
慈照院入道前左大臣
ちはるもちるなるはけしきれ
藤原政行朝臣
山かけのあさはみえすねかすかな
法印行助
織女のつまもまさきの錦かれし
法眼専順
しらかねふかしやま月の下りくら
法眼沼水
松風の本すゑやさけかなしさ
法眼専順
よすかにきくやのかの村時雨
智蘊法師
散るかとみえしれ枝にて枯れし
玄宣法師
河音とかしてかよふ紅葉かれし
宗砌法師
深の夜も月のさえかりつれし
智蘊法師
かかる月や山のはのたつ時雨
多々良政弘朝臣
時雨のかしこにさえかれる

はくしくれにけり時

宗祇法師

秋すゑの枯のゝさき露を
九月し雨のふりかゝる草の

能阿法師

きりはれぬ秋はあさこれ雨の山

多々良政弘朝臣

雪わきさくらちりてつゆ秋もあれ
暮秋のうらと

宗伊法師

秋のやまくみえしつゝ下くる

前大僧正義運

さふらく秋はれとくさは紅葉ふる
道にのみ世のたくひしれ仰時
もふくもさてたえてつりせ

権大僧都心敬

雲はやはくさのゐる世のふくしれる
おもしろの信濃にくらみて時雨
の参る

宗祇法師

世にふるもはやくもしられやすし

法眼専順

冬木のしふりとふりとてしれ散り

権大僧都心敬

問月とい月とよみて何ゆゑか
忍誓法師
何とゝい浪の雪やまかれしわれ
法眼専順
伊吹山しらくも雪ふりしるか
秋の月よしや人の道するよ
多々良政弘朝臣
旅のかりすさきよのゝ白妙花
智蘊法師
秋の月木のもと春さへ匂ふかな
白月の光えて
中春法師

ちりそめはうすきも色の紅葉かれし
冬の夜の雨の中よ
源政宣
木のもとし落葉みなふみあかれ水
武刀郎親重
木葉しもまたはみえぬ梢かな
法印觀
風見えて木のはに白河紅葉かな
見え人ことそ
秋の月山にも秋あるれ
法眼専順
露こほり河としきりらるか

道空法師

澗のをとハこほれ松の風かな

宗祇法師

氷りけりくまるし澗の水

宗伊法師

吹しとふ川せこゑつきおもれし

水音澗より細道寺は

後三条入道右大臣

ありて猶氷はすゝきさむかる

明応元年十一月廿五日

哥は　御製

月やすさまれてのこほるとも氷

冬のみ句は

慈照院入道太政大臣

ねさとおもふあらしの玉しもそと河原

左大臣

雪ふりてハ見ゆるつゝ行とまる

前左大臣　実

山や雪ふりゆく日の吹の家こそ見れ

権大僧都心敬

みにはのゆきと雪るこゝ作のくさかな

秋すゝと思ひの雪のタかれし

権大僧都日与

潮なみもさてみとすゝし雪のタかれ

宗砌法師

しくれとも林にしらぬ雪の松

ふかくもりゆくことさへ秋の月

宗長法師

ふるさやかりてみる庵に庭の雪

十月の夕の雪のふりかけし時の

道すかる

かり雪ならすもくれ分行の行ち葉かな

後知足院入道前関白太政大臣

雪の哀れよ

御製

庵のうち枯木にうつり雪の顔

大内にもいてかし比ゆきとまらぬ雪

雪はみえて風さしのうち庵の松

三条殿親王

花ならぬ花とし雪の木根のよ

中務卿の道すかる雪と

普広院殿太政大臣

いりかりとこの夜は雪のかけあかつ

内裏にく百韻の和漢連句よ

権大納言晴通

朝さむみの雪しもをまつ初よかな

冬のかるまに中ま

源勝元朝臣

花とらし雪まよりか色も風しるよ

法橋忠義

若しら秋かきりハ又八月見られし

従三位義教

月さかハ雪ふりしへのかりかな

智蘊法師

月雪の冬もとをりにあけくれし

宗砌法師

まち新しもと山すその雪の杉

藤原房定朝臣

塵の雪ふりしとめもせし月かな

多々良政弘朝臣

雪も得ず門ある山の家もなし

肖柏法師

かりそめに見えしや山の雪の庭

法眼専順

よそ雲し绮のかりの色こそ夕されし

宗伊法師

あらつ梅やりしく白雪のもしらかな

花梅と　法眼専順

冬さらやゆくへらへつへしのはな

多々良政弘朝臣

しらや其かとし花さけの宿の梅

前関白　良実

春まちてえしらくハ梅のこゝろかな

観音寺入道前太政大臣

梅かゝはいつくのかぬは四方の雲

前左大臣

よしの山はなはこの花一本かな

風吹のみなみ寺

太政大臣

世は春のとしつきの年のくれ

法眼行助

うき雨のかゝりしたか年かな

前大僧正道

ふしの物語きくのちの年の暮

小札

二楽軒飛鳥井雅康卿

大内多々良政弘

初二巻 冊

外二巻冊

古筆

[illegible]大勢に

[illegible]

[illegible]さ[illegible]

[illegible]一本[illegible]

[illegible]

墨付紙數八十五枚
礼紙五枚
墨付紙數六十四枚
礼紙四枚
二条家飛鳥井雅康卿
大内多々良政弘